

# サンゴ礁保全の普及啓発手法として用いた「聞き描き」

大堀 健司（エコツアーふくみみ／石垣島アウトフィッターユニオン）

キーワード：聞き描き、石西礁湖

## 1. はじめに

石西礁湖は石垣島と西表島の間に広がる日本最大規模のサンゴ礁域で、近年そのサンゴ礁生態系が陸域からの環境負荷、高水温による白化、オニヒトデの大量発生などにより危機に直面している。このような状況から 2006 年に石西礁湖自然再生協議会が発足し、そのマスタープラン<sup>1)</sup>では自然再生の長期目標として「1972 年の国立公園指定当時の豊かなサンゴ礁生態系を取り戻す」とされた。

しかし、その当時のサンゴ礁を実際に見たことがある人は限られており、「取り戻す」ための目標としてサンゴ被度などの数字が示されている。そこで石垣島沿岸レジャー安全協議会（現石垣島アウトフィッターユニオン）では、子どもを含めた多くの人たちにとって取り戻したいと思える共通の原体験足り得る普及啓発用冊子の制作と配布を計画した。

冊子制作にあたって当初、当時のサンゴ礁を知る人たちにインタビューをする「聞き書き」を考えた。

ブログ king-biscuit WORKS<sup>2)</sup>によると『「聞き書き」とは、まず「問答」として理解されるようなもの』であり『「問い」と「答え」とのやりとりの連鎖こそが「会話／おしゃべり」の基本単位であり、その過程で「はなし」を発見してゆく』ものであったはずであり、『話し手の言葉を録音し、一字一句すべてを書き起こしたのち、ひとつの文章にまとめる手法』として捉えられがちな現状に疑問を呈している。

そこで「聞き書き」本来の「問い」と「答え」のやりとりを手法とし、さらにより多くの人がイメージしやすいイラストをアウトプットとした「聞き描き」を試みた。

## 2. 方法

多くの人に共感を持ってもらうため、石垣島の異なる 5カ所の地域で生まれ育った年代の異なる 5人の方にインタビューを行った。インタビューのテーマは子どもの頃に海とかかわった思い出。インタビュアーは 3人。イラスト担当、文章による記録担当、インタビュー全体の記録担当とした。イラストはその場で話を伺いながらラフなものを作成し、後日正式なイラストとして完成させた。

また「聞き描き」の手法を用いた環境学習を小学校で実施した。

## 3. 結果

インタビューした結果をイラスト化させる過程で、本来の「聞き書き」が有していた「問い」と「答え」のやりとりを自然な形で行うことができることがわかった。例えば、現役海人へのインタビューにおいて、子どもも自分に夜の海に潜って漁をした話（図 1）の際、どのような服装で潜っていたのか、網の色は何色だったのか、明かりはどのようなものを使

っていたのかなど、イラストを完成させるためには、そのシーンに必要な細部にまで聞いておかなければならない。インタビューを受けている当人は話をするつもりでなかったことや尋ねられるまで忘れていた事柄も多くあった。イラスト化のための「問い」と「答え」を繰り返すことで会話も進み、インタビューを受けた方が満足する成果が得られた。

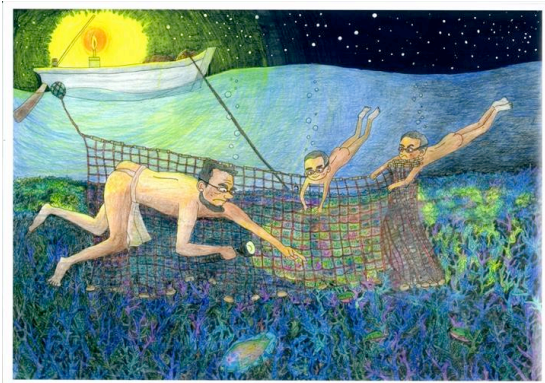


図1「海人一家」

5つの「聞き描き」によるイラストを中心としたストーリーは『あんなだったよ～石垣島』として冊子にまとめられ、島内各所で無料配布を行うほか、大型のパネルにしてイベントなどで掲示した。また、地元の新聞でも連載を行った。その結果、多くの方から反響をいただき、「あんなたち、まるでその場にいるようで見てみたいだね」と電話をいただいたこともあった。

## 4. 学習プログラムとしての「聞き描き」

「聞き描き」を小学校の環境学習として実施した。

ゲストとして地域のオジーを授業に招き、オジーの子ども頃のマンングローブの様子について話をしてもらった。小学生たちには話をもとにその風景の絵を描かせた。絵を描く過程でわからない箇所については、オジーにさらに話を聞きに行く。オジーも絵を描いているところを覗き込み会話が弾む。一方向的になりがちな「お年寄りに昔の話を聞く」という授業が、「聞き描き」の手法を介してコミュニケーションを取りながら今と昔の環境の変化を考える授業として成立させることができた。

## 参考文献

- 1) 環境省那覇自然環境事務所石垣自然保護官事務所, 2005『石西礁湖自然再生マスタープラン』
- 2) king-biscuit WORKS (<http://d.hatena.ne.jp/king-biscuit/>) 『聞き書きは、なぜ「難しい」ものになってしまったのかー「聞き書き」という手法の本来的可能性についての一考察』